



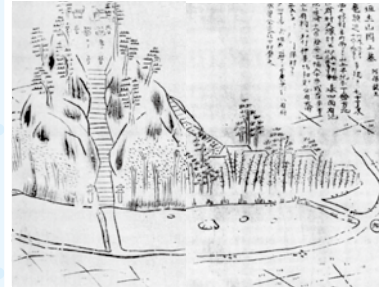
▲伝阿保親王塚(京都市伏見区深草正覚町) 願成寺の南方すぐ。願成寺は始め現深草願成町に創建。



▲阿保山願成寺境内の阿保親王墳墓(京都市東山区本町) 願成寺は阿保親王の開基。



▲阿保親王墓所(親王塚古墳) 宮内庁が管理。12月の命日には正辰祭が行われる。芦屋市翠ヶ丘町



▲「河内国陵墓図」 右が北で河内大塚山古墳前方部。左が南で後円部を描く。後円部頂には、大塚村の氏神の天満宮が鎮座する。東からの描写。



▲「河内鑑名所記」 左上に河内大塚山古墳、中央に稚児ヶ池、下が阿保村集落。

松原・芦屋・京都・奈良に伝承阿保村に接する河内大塚山古墳

本市阿保の地名由来は、平安時代前期、阿保親王(平城天皇皇子)が同地に別宅をつくったことに拠ると伝わっています(「歴史ウォーク」31・32)。

阿保親王は、現在の長尾街道沿い北側の松ヶ丘一丁目(旧阿保村)に稚児ヶ池(親王池・棒池ともいう。潰廢)を掘り、地域の開発を指揮したといえます。親王は、稚児ヶ池の西側の字、公垣内にあつた親王殿に居を構えたと伝わります。死後、別宅に親王の霊を祀る阿保親王社が建てられたといわれています。

現在、菅原道真を祀る阿保神社本殿に並んで、親王を祭神とする摂社の阿保親王社が鎮座していますが、旧親王殿から移したものです。

親王は、現奈良市法蓮町にあつた父・平城天皇の萱の御所を引き継ぎ居住したと伝わっています。この萱の御所跡に親王の五男の在原業平が親王死後、その菩提を弔うために創建したのが不退寺です。同寺に、阿保親王像(鎌倉時代)が所蔵されています(前回320号写真)。

一時期、親王は皇位争いの政変にまきこまれ、大宰府(福岡県)に左遷されました。のち許されて住んだのが、現京都市東山区本町の東福寺から、南の伏見区深草願成町あたりと伝えられています。

本町の町名以訛明治初期までは阿保(安保)町の地名も残っていました。

一方、兵庫県芦屋市にも阿保親王が別宅を構えたという伝承があります。同市打出町に親王の菩提寺として創建された阿保山親王寺があります。同寺縁起は、打出の地に親王や在原業平が住まいしていたと書かれています。近くに、阿保親王や菅原道真を祭神とする阿保天神社も祀られています。

こうした各地の居住伝承から、江戸時代以降、本市をはじめ、芦屋や京都にも阿保親王の墓所が伝わっていました。

本市西大塚一丁目にある河内大塚山古墳は、今でこそ、六世紀半ばの巨大前方後円墳と認識されていますが、江戸時代には親王御廟と伝わっていました。

河内最初の地誌である三田浄久の『河内鑑名所記』(延宝七・一六七九年)は、「阿保親王御廟 大塚という山なり」とあります。

貝原益軒の『南游紀行』(正徳三・一七一三年)は、「その乾に小き山遠くみゆ。王塚山と號す。これ阿保親王の墳なり。保の寺、おとよむべし。その辺阿保村あり」と紹介しています。同年の寺嶋良安の『和漢三才図会』も「阿保親王墓 大塚山に在り」とします。

伴林光平は、『河内国陵墓図』(文政十二・一八二九年)で、「埴生山岡上墓 阿保親王」と推定しています。ところで、江戸時代、長州(山口県)

の藩主であった毛利氏は、阿保親王の嫡孫である大江音人を始祖とします。このため、毛利氏は阿保親王墓所の調査や代参を行っていました。

とくに、文政元年(一八一八)五月十六日から、長州藩士の村田清風に命じ、河内大塚山古墳をはじめ、奈良・不退寺墓地の在原業平供養塔や、摂津・打出村の今では四世紀の円墳と考えられる親王塚古墳を調べさせています。

同時に、長州藩京屋敷の留守居役は京都の現東福寺塔頭の願成寺やその南の現伏見区深草正覚町に伝わる阿保親王塚二カ所を報告しています。

清風は五月二十日、阿保親王の母(葛井藤子)の出身地である葛井寺(藤井寺市)で一泊し、翌二十一日、大塚村の庄屋治兵衛を案内役として河内大塚山古墳に入っています。

翌日の二十二日には、清風は打出村を訪れました。調査の結果、長州藩は文政五年(一八二二)、親王塚古墳を正式に阿保親王墓と決定しました。文政六年(一八二三)、塚の修理工事を行い、塚の廻りには菱垣をめぐらし、正面に拜所も整備しました。現在、宮内庁は同塚を阿保親王墓として祭祀を続けています。

明治時代以後、河内大塚山古墳は、阿保親王墓とは考えられなくなりました。阿保村に別宅を構えたという親王の高貴さゆえに、近接する巨大古墳が候補となったと思われれます。